

表月帖

昭和十五年三月
春成父手録

特別
14
1919
721



特
イ 4
1919
106
721



御巻

子まのふきくすの聲をあらはんと
狩をたのしむ人もきくくむ

かんくにならぬる庭の木の影を
たのぬ夜もさむいからけり

思ふはあはれなるは

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

ときふい忘れぬ大和心を

年々おひひせれも山河を

波をそ抱ひて夏なあけけり

わたどのく下わく舟の音きこも

こよ一花ときまうにけりこよ

素くとも流るゆもわくをん
あけけりときまうにけりこよ

國民のおくちあくとけりこよ

たひよとけりあけけりこよ

たひよとけりあけけりこよ

枕のよる月のまじりく

いざいしもわかぬあまの老いあか
きしきり人にいかにあはれ

のこ人の心をあはれこころあはれ
せうしうもあはれこころあはれ

あかしのあはれあはれこころあはれ
こころあはれをまじりく

はきいづく都大路をまじり人は
いざいしもあはれあはれこころあはれ
せうしうもあはれあはれこころあはれ
いざいしもあはれあはれこころあはれ

年高き老木の根いにいくの

あといふたのいさうな

たぐいともたぐい終は世あき

よはひをれせのいやなを

いふれは測るまゝに

いふ思ひをいふに

あゝいふ世も動くまゝに

いはけい根がす松の

六山田の舟のほと石細い

あつらあひてそいふ

國の形をうせりし人を思ふか
くみゆく秋の空をたぬれ
おのころとせむき朝かふ園せり
の帯とる手七さそこいふ
天つ神やあたま一國えは

我國さうたふとさうた
いと助とあみそ思ひいふ
神代の道七と國かぬか
おのころ仇の心七磨くまで
誠の心をあめやくんたみ

大室に從うへて見わたる高嶺を
登ればのほらるるはあつた
國を思ふ道にあたらはなあり
こゝろの場をまつた、あ
事―あゝふもあま入る

思ふあやあてあま
あはかうあにまふと夕立の
あう出ぬまのあうああ
旅人を命にのこしと夕立は
あ嶺はああこえてあ

ますらすをの心に似たりいさこも
まのふふしき窓のくれ作

千年まそあひせさふんくは
生心みのほとハ時のまろし

國を思ひぬえさる蛇のあそひし
世に安きをえつ劍いふか

困りすぬあふハと大の援きを
仇もあふぬ壁にものか

舞きここのなるのこのとつし
曙

かきうあま身の力たゆさん

朝のふとろ手にかゝる白雪を

いたくく身とくいつくうに先

更くく夜や炭も灰を砕く音

去つともて戻たる庭の柳のふ

本二首終大

竹の子やあまうとまをか人の夜
大江丸

花月や苔木にあら人の
梅を

買ふは程こほしと行きし美菜也
日

元日や鬼いしく千七膝の上
日

命あるとまあるとをのどし山
白雅

命あるとまあるとをのどし山
白雅

年暮れぬま着るわらうはき
芭蕉

首くふ縄きんちりし年の先
芭蕉

夏日を越すうんーさよ手取履
芭蕉

紅さいた口もふくはみ
芭蕉

こぼれこ風拾いやくち馬
芭蕉

結ゆを解ゆ風り柳の家
芭蕉

吾は女身ハ狂ひよき柳白

根は切ぬそ枝末ハある枯尾花口

古の女の死にきこ人たぢ七

酒にしあ

大付旅人

言はさむと為さすべからに極と

炎きこよの酒にしあ口

あふみのく習しとをすと

海のみぬ人をよき見ば猿口

か七似志口

生るぬばついにば死ぬるよの死口

いさむらひの洞は樂くささあは

天のあつた雲のほまぢ月の舟

星の林に借きかゝるんよ

柿本人麿

あつとさつ竹ひんせつみの奥

あつとさつ竹ひんせつみの奥

曙の光

いさむらひの洞に根はふ竹と竹

いさむらひの洞に根はふ竹と竹

洞のくさし流るあをけふくこと

魔きあつとさつく竹と竹

滑らあつたあつとさつく風あつと

下陰くろき世の奥に

晴夜

吾か涙をよらこい涙こほす

鬼のたぐく考す木の空

燈台の七とんおろく素人鬼

我かひめ歌の浪りきかき

人奥ま人にさかす歌るる

鬼の夜更けを来は告げも
七とん

凡人のちりまういんど天地の心

めに流るるあかじ

以上晴夜

うふと来て我をかゝしの坊り丸
大あのかくわらうと寝るかゝし丸
どこし〜着いかゝしはあかきけを
まか、ト三ツ四ツ五ツといつ〜や
大名は濡んてあつと炬燵ふふ

狭くもいつと飛習ひ尾の巻
我尾は飯櫃はあう曲らぬぞ
シシハ是切とはらう〜ころふ
又まや三文ぞもそんそよく
初夢都のまきはきかぬあひごと

以上二葉

露の世は得じまゝの世に
朝白も錢ぢけつあゝ浮世
世平よびかゝる露から先おる
一升といくらもあを露のま

以上二条

狐や弱縁に白のたまき
衣に

濁王のまや牡丹を
吐かんとき

古井戸や飲る老ぶ魚の
音(響)

収帳つゝと翠微
くらん歌の田

志かしく志きらるるまよ

慈母の恩慈母の抱懐

おんまをさす

たんぽく花咲く三、其

五には黄の三には

白しに得すまを

此跡のりす

以上巻村

唐國の席ふすまに
入らざるも
末に危ふき

席の子をうへ
入らざるも思ひかけ

こころ人妻

景拊

秋風や酒杯に

漁者悲者

不ぞ一つ埋る

若き所

釣り上げし鯉の巨公

まや吐く

毛の染布をまぬを祝く

女あり

時鳥よあ城をすいかに

以上某村

鐘の音えと毛の香は撞く

夕心家

閑けさらや岩のくみ又の

蜂の巻

五月のふとあつをまし

高き川

雪の空にいくつ山崩れし
月の山

風流の如は奥の

田植子

以上老甚

いやしくと望まふまふと

畫屏式

石の香や夏草赤く

雨後日暮し

枝まゝそせ世にかけはぬ

道にふ

ちふむざんや甲の下の

きりりくす

菊のそ咲くや石巻の

石の間

猪も北に吹く

望みかこふ

以上芭蕉

義仲の存えの山か

月悲し

月いつこ鐘の沈みも

海の底

都に又ふゆきまふてや

餘のふら

やうと死ぬけしきいんえす

餘の考

市士の風や扇ん載せを

江戸みやげ

二日酔いのふらさの

あつあつだ

おを着て風をあ寐の

捨ふれ

白魚は石にさすは

清めし

きりくすきき音に響く

火焼くふ

花がしまるふこけけけり

花つとまき

かおの、度々まきけり

し年の暮

塩鯛の遠くきこも寒し

魚の店

以上燧山

初はかりとすんは天宮の

昔も

味考の張合に飛ぶ答ふ

逃げ来て消息のふ初巻

我神と親とたのちと逃巻

大巻ゆきくと通つたり

初巻其手ハ冷いぬく

初巻をくしくすおれをよ

故いふしのさをも切ら巻丸

楽くと病を嘆きんけり

名うし菊

人里の植うれは曲る心巻丸

吟く聲も即ちつひなと世の平

世の平、吟く声さくも
上二ひて手

吟き声しと五もも川の方

佳い系

今の世や山の深も

夜番おる

米蒔の罷とよ鶏か

蹴合あそよ

小一丁家不お癒の

たらげれ

うお釘のやうな手運と

秋の介

苦の海邊と名なき伏す

秋の暮

水邊に身を捨てておたぬ物

あか上の鐘とむくく夕涼

以上一巻

用お物は席も猫も世の人

形のみえてて空あふかき

さしそわく人の日今の数

都大路に夏は表にけり

ゆり来り我は是言をもつきむり

出る犬の子の世つき

子を持つ身こそよく
うぬしけ

うらみみの世の人にくらべて

夢の世と夢見しあめは夢

まご夢見るあめを

夢とこそいふ

鳥の啼く木々の梢に花は

我も深世といさ交り
あま

以上良寛

まを毎ん或世の人かなあめこし

桜よ誰と思ふ出つらむ

うらみ世年

松島の秋ささるるに月夜

いとる尾花の宿もあはれ

人とはぬるの屋の夜に

とほすかたりのお館の音はる

さす梅の桂も影のえに

舟のちとよ月つ白浪

舟まゝ速山里きく夕ぐれに

入江のたづのるもぞま

以上集家

言さおし波をまそは

見すんども

まこと 獨ぞたふさるる

景拊

麻はし京

